# ガンダーラ文化圏における燃燈仏授記図の展開

## ——法蔵部所伝文献を手がかりとして——

小　山　一　太

目次

0．はじめに
1．ガンダーラ文化圏出土例の諸問題
　1-1．作例の分布とパキスタン出土例の様式的特徴
　1-2．アフガニスタン出土例の様式的特徴
2．文献にみる燃燈仏授記説話
　2-1．燃燈仏授記説話に関する文献
　2-2．『四分律』、『仏本行集経』の関連性と流布地域
3．法蔵部と燃燈仏授記図の伝播との関わり
　3-1．カーピシー地方出土例と法蔵部所伝文献の照合
　3-2．法蔵部所伝文献の伝える燃燈仏授記説話の特徴
　3-3．カーピシー地方出土例と雲崗石窟の諸作例の関連性
4．おわりに

## 0．はじめに

釈迦の前生譚の一つである燃燈仏授記説話が、クシャン朝[①]下のガンダーラ文化圏（Greater Gandhāra[②]）において大層好まれたことは、この地域出土の多数の浮彫彫刻によって知ることができる。一方、インド内部では、アジャンター後期石窟（5世紀頃）の諸作例（第19窟、26窟）、ムンバイ郊外のカンヘーリー石窟（グプタ朝時代、第26窟）、ナーランダー（パーラ朝時代、7世紀頃）に現存するのみで、その遺存数は極めて少ない。さらに、それらインド内部の作例が、ガンダーラ文化圏の作例の制作年代（1世紀～4世紀頃）より後代であることから、本説話はガンダーラで図像化されたとみることができる。

本説話は、前世の釈迦が当時の仏（過去仏）である燃燈仏（Dīpaṃkara）から記を授かるという内容から、釈迦の生涯を説く仏伝文献においてしばしばその始まりに配置される。さらに、

連続する仏伝浮彫群の始点に配置されていたことがわかる作例が確認でき、仏伝文献にみられるような燃燈仏授記を重視する傾向が図像からも窺える。

一方、現アフガニスタンのジャラーラーバードを北西へカーブル河を上ったところにあるカーブル周辺と、その北方の盆地一帯に位置するカーピシー地方の作例では、同じガンダーラ文化圏に属するものの大きく表現を異にする点で従来注目を集めてきた。カーピシー地方出土の燃燈仏授記図のみ、説話的な仏伝図という枠組みから離れ、燃燈仏信仰を窺わせる燃燈仏礼拝像とも言うべき形態をとる。

さらに、カーピシーの図像を精査し、文献と照合したところ、法蔵部所伝『四分律』、『仏本行集経』 にのみみられる記述と合致する箇所が確認された。これは、カーピシー地方の作例と法蔵部との関係性を示す重要な資料として挙げられる。従来、ガンダーラ文化圏は説一切有部との関連性が強調されてきたが、カーピシーでの燃燈仏授記図の制作に関していえば、法蔵部との関連性を看過することはできない。そして、この２つの法蔵部所伝文献では、釈迦成道後、最初の優婆塞になる二商人に対して釈迦自身が燃燈仏授記を説くという、他の文献にはみられない興味深い仏伝の伝承形式が確立している。

よって本稿では、法蔵部所伝とされる『四分律』、『仏本行集経』にみられる燃燈仏授記説話が、釈迦成道後の「二帰依の商人」という物語中に挿入されていることに着目しつつ、ガンダーラ文化圏、特にカーピシー地方の作例について考察を行う。本研究により、カーピシー地方特有の図像様式と法蔵部との関連性の解明を目指す。

## 1．ガンダーラ文化圏出土例の諸問題

### 1-1．作例の分布とパキスタン出土例の様式的特徴

本章では、ガンダーラ文化圏それぞれの地域の作例を確認する。ガンダーラ文化圏出土の燃燈仏授記図は、筆者が未見の26例を含め、92例を確認している。その内訳は、以下の【表１】に記載した通りであり、ガンダーラ文化圏に広く受容、制作されていたことがわかる。収集した作例にはNo.を付し地方別に整理を行った。以降、本稿では、出土地及びNo.でそれぞれの作例を呼ぶこととする（文末掲載【表２】参照)。

【表1】ガンダーラ文化圏出土燃燈仏授記図地方別集計表

| 出土地方（合計） | 遺跡名（出土数） | 未見（出土数） |
|---|---|---|
| ガンダーラ地方（23） | サーリ・バロール（1）、シクリ（3）、ジャマール・ガリー（2）、タフティ・バーイ（3）、ラニガト（1）、スワビ（1）、チャルサダ（1）、ナートゥ（1） | サーリ・バロール（2）、タフティ・バーイ（5）、ローリヤーン・タンガイ（3） |
| スワート地方（12） | ブトカラⅠ（6）、パーンル（1）、スワート近郊（3） | ユースフザイ（1）、ナーワガイ（1） |
| ナガラハーラ地方（2） | ハッダ（2） | |
| カーピシー地方（13） | カーブル近郊（1）、ショトラク（6）、カーピシー地方（1）、バーバー・ワリ（1）、ハム・ザルガール（3） | ショトラク（1） |
| その他（2） | ブネール近郊（1）、ディール近郊（1） | |
| 出土地不詳（38） | （25） | （13） |
| 立像（2） | スワート地方（1）、タルベラ（1） | |
| 総計92例 | 66例 | 26例 |

まず、燃燈仏授記説話の内容を確認しておきたい。管見の限り、燃燈仏授記説話を物語る主要な文献としては20ほどが知られるが、それらの記述を確認すると、おおよそ次のような骨子が共通している。

釈迦が過去世においてバラモン青年（以下、メーガ〈Megha〉[③]）であった時、燃燈仏（Dīpaṃkara[④]）が世間に出現する。それを聞いた青年は仏を供養したいと思い、**①女性（以下、プラクリティ〈Prakriti〉）から花を購入する（購華）**。そして、出現した仏に近づき**②散華供養を行う（散華）**。メーガが投げかけた華は落下せず仏の頭上に留まる。その後、仏の前に泥水が溜まっていることに気づいたメーガは、**③自らの髪を解き泥水の上に敷く（布髪）**。その行為をみた仏はメーガを褒め称え、「あなたは将来必ず仏となるであろう」と記を授ける。その言葉を聞いた青年は歓喜し、**④空中に飛翔し仏に対して合掌礼拝をした（浮遊）**。

ガンダーラ文化圏から出土している作例においても、以上の場面は重要な要素となっている。一例として、ラホール博物館所蔵である、ガンダーラ地方のシクリ〈Sikri〉出土例（No.2、図1）を取り上げてその像容を確認しよう。本図はストゥーパの胴部を飾っていたとみられる一連の仏伝図の一つであり、画面向かって左側に

図1．シクリ出土［No.2］

プラクリティから華を買うメーガの姿が見られる。城門前に立ち、右手に5本の蓮の華を持つプラクリティと、その横に左手に水瓶、右手に財布を持つメーガ（一部欠損しており判別が困難のため、もしくはプラクリティが財布を持つ）が表される。そして、画面中央向かってやや右よりに他の人物より大きく燃燈仏が配され、その前方に、右手を挙げ今まさに散華しようとするメーガの姿が表現される。欠損してしまっているが、類例から判断するに恐らく右手には華が握られていたのであろう。散華された5本の華は燃燈仏の頭光に沿って空中に留まっている。燃燈仏の足下に平伏し、髪を敷くメーガは画面中央下部に表される。そして、燃燈仏より記を授かったメーガが空中に飛翔し合掌する様子が画面中央上部に描かれる。

このようにガンダーラ文化圏出土の本図は、異なった時間の場面を同じ図に表す、いわゆる異時同図形式をとり、基本的に①～④、または①～③の場面を表す。ガンダーラ地方の燃燈仏授記図制作の背景には既に、前述した①～④の説話の骨子が存在していたことが読み取れる。

ガンダーラ文化圏出土の仏伝図は、基本的にストゥーパ（小型の奉献塔を含む）を装飾していたとされるが、本構図においてもストゥーパの各部位に設置されていたことが明らかな例は存在する。ガンダーラ地方では、本説話図は仏伝の一場面として制作され、連続式仏伝図において、「托胎霊夢」と隣合わせに表現される作例も知られることから、「仏伝の始まり」としての役割を担っていたことが美術の上からも確認できる。[5]

さらに、ガンダーラ地方の北方の盆地一帯に位置するスワート地方では、ガンダーラ地方と図像様式的にはそれ程大きな違いのない作例が出土している。スワート地方での燃燈仏授記図の主な出土遺跡としては、1956年から1962年にかけて、イタリアの調査隊によって発掘された、当地域の最大規模を誇る仏教寺院址であるブトカラⅠ〈Butkara Ⅰ〉遺跡が挙げられる。B.C. 3世紀からA.D. 10世紀という長期間活動していたことが報告されている。[6] この地域において、サイドゥ・シャリフⅠ〈Saidu Sharif Ⅰ〉、パーンル〈Pānr〉と並んで数少ない考古学的発掘が行われた遺跡であり、ガンダーラ美術様式の年代観を考察する上で重要な遺跡となる。紙幅の関係上、ガンダーラ文化圏における燃燈仏授記図の美術様式的変遷の詳細は別稿をもって論じることとしたい。ブトカラⅠ遺跡からは燃燈仏授記図が6例[7]出土しており、当地域においても、本図が一定の関心対象にあったことが窺える。

### 1-2. アフガニスタン出土例の様式的特徴

ここまで、現パキスタン領にあたるガンダーラ地方、スワート地方出土の作例の様式的特徴を概観したが、次に、現アフガニスタンに位置するナガラハーラ地方、カーピシー地方の作例を見ていこう。

ナガラハーラ地方は、燃燈仏がメーガに記を授けた地、いわゆる本生処[8]として、法顕『高僧

法顕伝』（以下『法顕伝』）、玄奘『大唐西域記』（以下『西域記』）などの旅行記に伝承されている。[9]

『高僧法顕伝』（T51, №2085, p. 858c26-c28）

從此北行一由延到那竭國城。是菩薩本以銀錢貿五莖華供養定光佛處。

『大唐西域記』（T51, №2087, p. 878b26-c20）

至那揭羅曷國（中略）城東二里有窣堵波。高三百餘尺無憂王之所建也。編石特起刻雕奇製。釋迦菩薩値然燈佛、敷鹿皮衣布髪掩泥得受記處。（中略）其東不遠有窣堵波。是釋迦菩薩昔値然燈佛、於此買華。

『法顕伝』に伝えられることから、遅くともA.D. 4世紀頃には本生処としてナガラハーラ地方が設定されていたことが確認される（定方[1970]：p. 95）。しかし、ナガラハーラ地方出土の作例は管見の限りハッダ〈Hadda〉出土の2例[10]に留まり、様式的に両作例ともガンダーラ地方の構図をそのまま受容し、そこから大きな発展は無かったようである（図2）。本生処としてナガラハーラ地方が設定された時期と、当地において本図が制作されていた時期の前後関係は判断しかねるが、図像を見る限りは、形式化したガンダーラ地方の燃燈仏授記図をそのまま受容したといえ、さらには特別な発展も遂げず、あまり普及もしなかったようである。

図2. ハッダ出土［№24］

一方で、ナガラハーラ地方から北西へカーブル河を上ったところにあるカーピシー地方では、燃燈仏授記図は特異な発展を遂げ、燃燈仏の礼拝像といえる新たな形態を確立した。カーピシー地方出土の作例は、本稿では未見である1例（ショトラク出土）を含め、13例[11]を一覧に取り上げた。これらはカーピシー様式ともいわれ、正面性が強く、鈍重な体軀に焔肩[12]を持ち、仏の威厳性、神秘性が強調された姿といえる（宮治［2010］：pp. 94-95）。一見すると、説話性の強い他の3つの地方との関連性が薄い様に見受けられるが、№33（カーピシー近郊出土、図3）の様に①購華・②散華・③布髪・④浮遊の4つの場面を有し、いわゆる異時同図形式をとる点は共有されている。

№33の作例は、火焔文により縁取られた大きな楕円形光背を持ち、その中央に焔肩を持つ燃燈仏が一際大きく配置される。画面向かって右の下部には、右手に華を持つプラクリティと、右手に水瓶、左手に財布を持つメーガによる購華の場面が表現される。向かって左の下部には、右手に華、左手に水瓶を持つメーガによる散華の場面、さらにその足下には、地面に鹿皮を敷

き、布髪するメーガの姿が見られる。画面左上部には、左膝を立て、右膝を折り合掌するメーガ（梵天とのダブルイメージ）により浮遊の場面が表される。それに対応するように、右の上部には、左手にヴァジュラを持つ帝釈天が描かれる[13]。燃燈仏の頭上には、散華された華が5本、光背に沿って空中に留まっている。ただし、①購華・②散華・③布髪・④浮遊の4つの場面を有するとはいえ、これらの場面は燃燈仏の身体より半分以下の大きさで描かれるなど、他の地方でみられた説話性に富んだ本図とは異なり、それぞれの場面が燃燈仏を表すモチーフであるかのように表現されている。No.33の他に、当地においてほぼ完全な状態で残存する作例はNo.26、No.27、No.34の3例であり、No.26、No.34は購華の場面を欠如するが、様式的にみてカーピシー地方ではNo.33の様な燃燈仏の礼拝像的作例が一般化していたのであろう。

図3．カーピシー近郊出土［No.33］

さらに、カーピシー地方の構図が、インド内部や後述する中国、特に雲崗石窟の作例に影響を与えたことは明らかである。カーピシーは、燃燈仏授記説話の図像的・思想的変化が確認出来うる地として注視されるのみならず、他地域への図像ないしは説話の伝播を考える上でも非常に重要な地域であると言える。

## 2．文献にみる燃燈仏授記説話

### 2-1．燃燈仏授記説話に関する文献

燃燈仏に関する文献については、田賀［1974］が、原始経典および大乗経典数経を挙げ、さらに燃燈仏物語[14]を本生、出生・成道、授記の3つの要素に分け、各文献のそれぞれの要素の有無を図示している[15]。それをもとに、燃燈仏授記説話について記述のみられる文献をピックアップし、さらに、ガンダーラ文化圏出土の燃燈仏授記図にみられる主要場面の有無に関しても図式化すると、以下のようになる[16]。

場面①：娘から華を買うメーガ（購華）　場面②：燃燈仏に散華するメーガ（散華）
場面③：燃燈仏の足元に伏すメーガ（布髪）場面④：空中浮遊し合掌するメーガ（浮遊）
（※場面が上記の順番で記述されていれば○、異なればその通りの番号を○の中に記す。）

| 文献名＼場面 | ①購華 | ②散華 | ③布髪 | ④浮遊 |
|---|---|---|---|---|
| *Apadāna* | ○ | ○ | | |
| *Jātaka Nidānakathā* | | | ○ | |
| *Mahāvastu* | ○ | ○ | ○ | ○ |
| *Divyāvadāna* | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『修行本起経』 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『中本起経』 | | | | |
| 『太子瑞応本起経』 | ① | ② | ④ | ③ |
| 『六度集経』「七十三然燈授決経」 | | | | |
| 『六度集経』「八十六儒童受決経」 | ① | ② | ④ | ③ |
| 『生経』「佛説譬喩經第五十五」 | | | | |
| 『異出菩薩本起経』 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『増一阿含経』巻第十一 | ○ | ○ | ○ | |
| 『増一阿含経』巻第三十八 | | ○ | ○ | |
| 『増一阿含経』巻第四十 | | | | |
| 『四分律』 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『菩薩処胎経』 | | | | |
| 『仏本行経』 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『過去現在因果経』 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『大法鼓経』 | | | | |
| 『大悲経』 | | ○ | ○ | ○ |
| 『仏本行集経』 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 『大乗本生心地観経』 | | | ○ | |
| 『未曾有正法経』 | | | ○ | |

燃燈仏授記説話について述べる文献を概観すると、燃燈仏授記が過去に行われた事実、または燃燈仏授記が行われた過去よりさらに過去世において、燃燈仏授記が未来において行われるという予言を述べるのみで、その詳細は語られない文献も多い。そのため、ガンダーラ文化圏出土の作例にみられる主要場面に対応する記述を有さない文献もあり、それらは直接には図像との照合対象とはならないが、他の文献との相互の関連性、類似性を考えるにあたっては一つの手がかりとなる。

次節では、図像との照合対象として絞られたこれらの文献中で、ガンダーラ文化圏でも流布していた蓋然性が高く、後述する現アフガニスタンのカーピシー地方の作例と対応する記述を有する法蔵部所伝『四分律』、『仏本行集経』を取り上げ、これらの性格及び、ガンダーラ文化圏での流布の可能性について言及する。

2-2.『四分律』、『仏本行集経』の関連性と流布地域

法蔵部所伝である『四分律』は、A.D. 410-412に罽賓（ガンダーラ）出身の仏陀耶舎により訳出された律蔵であることから、ガンダーラ文化圏で本書が流布していたものであることは想像に難しくない。赤沼［1925］は、『四分律』と隋代に訳出された『仏本行集経』の関連性について以下のように述べる。

> 燃燈仏授記において『仏本行集経』と『四分律』は、最も整った形を有し、全く同じ物語といえ、『四分律』のものは簡単であり、『仏本行集経』のものは複雑かつ長い。この両書はともに法蔵部に属するものだが、『仏本行集経』はその後にこの物語が迦葉遺部の説であることを記している。よって、他律蔵の中では燃燈仏授記が記されないことからも、『四分律』は『仏本行集経』からこの物語を転用したとする。仏伝は律蔵を通して発展した原則から外れてはいるが、第一に律蔵において、『四分律』に記されたものは『十誦律』に記されるのが普通であるがそれがない。第二に燃燈仏授記が『四分律』においては、仏伝書としてあるべき所になく、毛髪で卑しめてはならないという事例に出した迄であること、第三に、後に仏伝書から資料を採用したと思われる節があることから考えて、『四分律』の燃燈仏授記は、『仏本行集経』から転用した。[17]

さらに田賀［1974］も、『仏本行集経』、Mv. 等の誓願にみられる下化衆生の面を含まない、つまり誓願を重視する点において、これら両経の燃燈仏授記よりも早く、『四分律』の燃燈仏授記が成立したとする（田賀［1974］：p. 160）。

近年、法蔵部所伝文献に記される燃燈仏授記説話の伝承形態の意図を、同部派の在家信者と仏塔との関連性により解明しようと試みた天野［2012a］は、

> 法蔵部には、既に別の文献において燃燈仏授記が存在し、それを『四分律』が引用し、釈尊の髪が過去世より多くの人に畏敬、供養されてきたことを示す意図をもって二商人の帰依の物語に組み込み、現在の形となった。以上の次第をもって『四分律』「受戒健度」における燃燈仏授記が編纂されたものと考えられる。[18]

と、述べている。以上、『四分律』の燃燈仏授記説話が『仏本行集経』の転用とまでは特定できないにしろ、その近似性から、『仏本行集経』の燃燈仏授記説話と法蔵部との強い関係性を窺い知ることができる。

法蔵部の影響がガンダーラ文化圏に及んでいたことは考古資料によっても裏付けられる。現在のアフガニスタン（ハッダか）より出土した、大英図書館所蔵のカローシュティー文字で書かれた仏教写本は、法蔵部への寄進である旨を銘に記した壺に納められていたことから、法蔵部の影響が、この地域へ及んでいだことが示される[19]。また静谷［1978］も、法蔵部がガンダーラ地方のジャマール・ガリー遺跡に存在していたことが、当遺跡出土の片岩角石刻文により承認されるとする[20]。以下にその銘文（Kharoṣṭhī）と塚本［1996］による和訳を記載する[21]。

saṃ 1 1 1 100 20 20 10 4 4 1 aśpai[u]sa paḍhaṃmaṃmi ṣavaena Poda[ena sa] haehi pida[pu][trehi]
[u]ḍiliakehi i[ś]e 'rañe preṭhavide dhamaute[oke] parigrahe sarvasa[pana][/]

359年、Aśvayuj 月の第 1 日に、声聞 Podaka は Uḍiliaka 家の仲間・父と息子と共に、この苑林において、法に専心する住処を一切衆生の所領として（or Dhamauteya <Dharmagupteya 法蔵部> の所領として、一切衆生の〔供養のために〕）建立せしめた。

下線部の解釈には二通りあり、S. Know［1929］[22] の解読によれば dhamaute oke（Skt. dharmayuktaḥ okaḥ）となり「法に専心する住処」となるが、H. Lüders[23] は Know が dhamaute oka と解釈した部分を dhamaute[aṇa]（Skt. Dharmagupteyānām）に修正し、さらに sarvasa [pana] の後に、他のカローシュティー文字銘文にみられる puyae という語があったとして、「法蔵部の所領として、一切衆生への供養のために。」と解釈した。Lüders の解釈について静谷［1978］も以下のように述べる。

「一切衆生の所領」というような表現は他の銘文には全く見られないし、また Know が考えた dharmayuktaḥ okaḥ も同様である。これに対して「所領」（parigraha）の語はしばしば部派名と共に現れる。したがって、Lüders の提言は極めて可能性が高いのである[24]。

以上の銘文を踏まえると、法蔵部が、ガンダーラ文化圏、とりわけガンダーラ地方のジャマール・ガリー遺跡に所在していた可能性があることが確認され、彼らが伝持した『四分律』、『仏本行集経』もガンダーラ文化圏との関連性が強いものと考えられる。

以上のことから、『四分律』、『仏本行集経』が、それらを伝持する法蔵部の存在によって、クシャン朝下のガンダーラ文化圏において流布していた蓋然性が高く、燃燈仏授記図の典拠となった文献の一つとして照合対象となりうることが確認された。

また玄奘は『大唐西域記』巻第二・烏仗那國（Udyāna、現在のパキスタン北西部のスワート地方）において、「律儀傳訓有五部焉。一法密部、二化地部、三飲光部、四説一切有部、五大衆

部。」(T51, No.2087, p.882, b20-21) と、述べている。[25] これは、法蔵部がクシャン朝時代のガンダーラ文化圏において、律を伝持し、教団として存在していたことが窺える重要な証拠資料の一つである。

## 3. 法蔵部と燃燈仏授記図の伝播との関わり

### 3-1. カーピシー地方出土例と法蔵部所伝文献の照合

これまでに述べたように、ガンダーラ文化圏内部、とりわけガンダーラ地方では、燃燈仏授記図は仏伝の一場面としての性格が強い。ストゥーパの円胴部を飾っていたと考えられる連続式仏伝図において、「燃燈仏授記」図に続き「托胎霊夢」図が配置されている作例が知られることからも、燃燈仏授記は「仏伝の始まり」としての役割を担っていたことがわかる。ガンダーラ地方、スワート地方、ナガラハーラ地方出土の作例をみると、他の登場人物よりやや大きめに表されてはいるが、燃燈仏は多くの場合メーガの方を見つめ、あくまでも物語の一場面として描かれていたことがわかる。

図4. ショトラク出土 [No.27]

一方、カーピシー地方[26]出土の燃燈仏授記図の作例は、同じガンダーラ文化圏に属しながらも、かなり独自性の強い表現であることが注目を集めてきた。カーピシー地方では、仏伝図の一部というよりも、燃燈仏授記の場面のみを単独で表した大型の作例が多数確認されている。これらは画面中央で燃燈仏が正面観で表された礼拝像的性格が強いもので、当地方における燃燈仏への強い信仰を想起させる。カーピシー地方出土例では、先述したNo.33を含め、3つの作例がほぼ完全な状態で出土しており、当地方の燃燈仏授記図の全体像を知る上で重要になる。

No.27　ショトラク出土　片岩　h.83.5cm　3-5世紀　カーブル博物館（図4）
No.33　カーピシー近郊出土　片岩　h.69.3cm　3-5世紀　ミホ・ミュージアム（図3）
No.34　バーバー・ワリ出土（メセ・アイナク遺跡群）　片岩（彩色、金箔）　h.41cm w.25cm　3-5世紀　アフガニスタン国立博物館（図5）

興味深いことに、燃燈仏は中央に大きく正面観で表されており、単独の礼拝像的な表現となっている。ガンダーラ文化圏内の他の地方では物語の一場面として表されていた本説話図が、カーピシー地方においては単独の尊像となり、礼拝対象として特に注目されていることが窺え

る。

既に第1章第4節において、これらカーピシー地方出土の作例の図像的特徴は確認したが、本節でさらに考察を加えたいのは、この地方の作例に見られる、メーガにより散華され、燃燈仏の頭上に留まっている華の表現である。この3例の散華された華の表現に着目すると、すべてにおいて茎が上を向き、花弁が下を向くという、他のガンダーラ文化圏の作例にはみられない統一された特徴を有している。一見、形式化した華の表現ともうけとれるが、法蔵部所伝『四分律』、『仏本行集経』には散華の場面に以下のような記述がみられる。

『四分律』巻第三十一（T22, No.1428, p. 785 b08-11）
時摩納遙見如來、心中歡喜、即以七莖花、散定光如來上。佛以威神、即於空中化作花蓋。廣十二由旬、**莖在上葉在下**。香氣芬馥普覆其國、無不周遍視之無厭。

『仏本行集経』（T3, No.190, p.667 b16-20）
將此七莖優鉢羅花、散於佛上。（中略）所散之華、住虛空中。**花葉向下、花莖向上**、當佛頂上成於華蓋、隨佛行住。

散華された華についてのこのように詳細な解説は、両経にのみみられる記述であり、他の文献にはみられないものである。『四分律』では散華された花が空中で花蓋となるというが、燃燈仏に向かって華が開くように、茎は上に、花弁が下向きになったと記している。カーピシー地方出土の3例は、この両経にみられる散華の表現と一致している。

ただし、両経のそれぞれの訳出年代は、『四分律』がA.D. 408-412年頃、『仏本行集経』はさらに下るA.D. 587-592年頃のため、既にカーピシー地方においては燃燈仏授記図が制作されている蓋然性が高いが、当地方出土の本図の華の表現が文献から引用されたものであるのか、または、先に図像化されていた表現を文献が引用したかは定かではない。しかし、ガンダーラ文化圏の他の地方の散華の場面を今一度確認すれば、ガンダーラ地方は散華された華の表現が統一化されていないが、そのなかでタフティ・バーイ出土であるNo.7のみ、カーピシー地方と同様に、茎が上を向き、花弁が下を向いた表現がとられている。No.7に見られる散華された華の表現は、

図5. バーバー・ワリ出土 [No.34]

他のガンダーラ地方出土例、または出土地不詳例にも見られないことから、当地方ではあまり受容されなかったようである。だが、少なくともカーピシー地方出土例に見られる下向きの華の表現が、ガンダーラ地方で既に表現されていた可能性がある。

### 3-2. 法蔵部所伝文献の伝える燃燈仏授記説話の特徴

燃燈仏に散華された華の下向きの花弁表現のみならず、カーピシー地方に特徴的な単独の礼拝像的性格も、法蔵部所伝文献である『四分律』、『仏本行集経』にみられる燃燈仏授記説話の位置づけと関連するように思われる。

法蔵部所伝文献の伝える燃燈仏授記説話は、仏伝の始まりではなく、釈迦成道後の「二帰依の商人」という物語中に挿入されているのである。

先述したように、燃燈仏授記説話は、釈迦が過去世でバラモン青年であった時、当時の仏である燃燈仏から将来釈迦仏となることを授記されるという内容から、以下の表[27]に挙げられるように、釈迦の生涯を叙述したいわゆる仏伝文献の多くは燃燈仏授記をその始まりに置く[28]。この点、ガンダーラ地方出土の作例は、連続する仏伝浮彫群の始点に配置されていた作例が多数確認できることと対応していると考えられる。

| 文献 ＼ 内容 | 燃燈仏授記 | 双神変 王宮 | 先兆天住生 | 降下入胎 | 誕生・出産 | 王宮生活 | 出家 | 六年苦行 | 降魔 | 成道 | 初転法輪 | 主要弟子帰依 | 祇園精舎建立 | 涅槃 | 釈迦族滅亡 | 入滅(荼毘) | 分舎利 | 統治 阿育王 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Mahāvastu | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | | ⑬ | | | | |
| 仏行本起経 | ① | | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑦ | ⑧ | | | | | | | | |
| 過去現在因果経 | ① | | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | | | | | | |
| 四分律 | ⑨ | ① | | | | ② | ③ | ④ | | ⑤ | ⑦ | ⑧ | | | | | | |
| 仏本行集経 | ①, ⑪ | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | | ⑬ | | | | |
| Jātaka Nidānakathā | ① | | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬ | | | | |
| 太子瑞応本起経 | ① | | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | | | | | | |
| 仏本行経 | ⑨ | | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | | | ⑫ | ⑬ | ⑭ | ① |
| 中本起経 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 異出菩薩本起経 | ① | | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | | | ⑦ | ⑧ | ⑨ | | | | | | |

しかし、法蔵部所伝『四分律』、『仏本行集経』では、成道後に最初の優婆塞になる二商人に対して釈迦自身が燃燈仏授記説話を説く形で挿入される。カーピシー地方において仏伝の起点としての表現をはなれ、単独の礼拝像形式をとることとなった燃燈仏授記図の背景として、これら法蔵部特有の伝承形式が関わるとみることはできないであろうか。

「二帰依の商人」説話といえば、釈迦成道後、未だ弟子、僧団ともに存在しない中で、二人の商人が仏と法に帰依（二帰依[29]）し最初の優婆塞となるもので、仏教と在家信者の関わりを考える上で非常に示唆に富む物語である[30]。『四分律』巻第三十一・受戒揵度に説かれる「二帰依の商人」説話の概略は以下の通りである。

「二帰依の商人」『四分律』巻第三十一・受戒揵度（T22, No.1428, pp. 781c12-785c 27）[31]

釈迦が悟りに達し、その後七日間何も口にしていないと聞き、通りがかった二人の商人がブ

ッダに食べ物を提供した。しかし、釈迦は食べ物を受け取るための器を持っていなかった。すると四天王がそれを知り、釈迦に鉢を提供した。その鉢で食べ物を受け取った釈迦は二人の商人を祝福し、仏と法に帰依することを勧め（二帰依）、かれらはそれに応じ、最初の在家信者となった。

その後、二人の商人が釈迦の元を離れる際、自分たちはこれから何に対して礼敬供養するべきなのかと釈迦に尋ねた。すると釈迦は自らの髪と爪を与え、これらを礼敬供養し福を得なさい、と答えた。しかし二人の商人は、これら（髪と爪）は世間では卑しいものとされているため、なぜ釈迦がこれらを供養するべきというのか理解できず、その旨を釈迦に尋ねた。すると釈迦はここで、**仏の髪と爪の供養とその功徳を説くため、種々の神々が仏の髪、爪を供養してきたこととともに、燃燈仏授記説話を説く。**

商人たちは、菩薩道を学び仏の髪、爪を供養する者は必ず無上道を成ずることを知り、釈迦の元から去っていった。

このように、『四分律』、または同じ法蔵部所伝とされる『仏本行集経』において、燃燈仏授記説話は「二帰依の商人」の物語中に挿入され、在家信者であっても菩薩道を学び、仏の爪、髪を供養する者は無上道を得る（「賈人當知、學菩薩道、能供養爪髪者必成無上道」）ということへの説明となっている。このことは、『四分律』、『仏本行集経』において、「二帰依の商人」中に挿入される本説話が、在家信者にとって、大層重要な説話であったことを示している。

カーピシー地方特有の造形は、在家信者（商人）が主人公として登場する「二帰依の商人」説話の因縁としての、法蔵部が伝える燃燈仏授記説話によって読み解くことが可能ではないだろうか。そもそも図像の伝播には、在家信者、特に大陸を横断する商人は欠かせず、さらに、どの部派の教団運営も、商人などの寄進に依るところが大きかったであろう。このことは、インド、およびガンダーラ文化圏で出土する、寄進銘文付きの図像や壺などから確認できる。

以上のように、カーピシー地方出土の3例の礼拝像的な性格と図像的特徴は、関係する文献のなかでも、法蔵部所伝『四分律』、『仏本行集経』にのみ存在する記述と対応するものと考える。

この点は今後さらに追及すべき問題ではあるが、次節では、燃燈仏授記図と法蔵部の結びつきが他地域に伝播した例として、中国初期の仏伝美術にみられる燃燈仏授記図を取り上げて関連性を考察しておきたい。

### 3-3. カーピシー地方出土例と雲崗石窟の諸作例の関連性

パキスタンで初めて制作された燃燈仏授記図が、ナガラハーラ地方を経由し、カーピシー地

方へ伝播したことは様式的に見て疑いの余地はない。しかし、ガンダーラ文化圏からさらに他の地域への伝播、あるいは燃燈仏授記図がそれぞれの地域でどのように受容されたかを考察することで、本図の展開がさらに明確なものとなる。

中国初期の仏教美術研究では、ガンダーラ美術、なかでもカーピシー地方との造形活動上の関連性が指摘されている[32]。燃燈仏授記の図像においても例外ではなく、安田［1981］ではカーピシー地方出土と雲崗石窟の諸作例との関連性が指摘され、中国・南北朝時代の本生・仏伝美術の様相を論じた李静傑［2000］によって、燃燈仏授記図についても作例を挙げながら制作の背景について考察がなされている。

これらによれば、中国において燃燈仏授記図が造形化され始めたのは北魏中期頃とされ、現存する作例で最も時代が遡れるものは、北魏和平二年（A.D. 461）に制作された、陝西省西安王家蒼出土の釈迦坐像の背面に描かれた作例である[33]。正面に釈迦とみられる大きな光背を持つ禅定仏が表現され、その背面に下からスダーナ太子本生、燃燈仏授記、釈迦誕生前後の仏伝場面、そして弥勒菩薩が描かれる。類例として、皇興五年（A.D. 471）に制作された陝西省興平県出土の交脚弥勒菩薩像の光背背面に描かれた作例が挙げられる[34]。

これら２例に共通することは、どちらも中国の中原地方での制作で、典拠として『修行本起経』、『太子瑞応本起経』が考えられること、全体としては三世仏を意図した構成となっていることである。さらに、陝西省興平県出土の交脚弥勒菩薩像には銘文が彫られており、それによると、寄進者の祖先が功徳を積んだことが記され、現在世において寄進者が仏像を作り、この因縁によって親族などを弥勒に会わせたい、または神通力を得たいという願文が記されている[35]。これについて李は、「寄進者が儒童菩薩（前世の釈迦）の善行を真似て善根を植えるために仏像を作って、その功徳によって未来に成仏せんことが暗示される。」（李［2000］：p. 27）とする。

この銘文の内容から、燃燈仏授記説話は、仏像造像の功徳に重ね合わされており、ここでは、燃燈仏授記信仰が、仏像造像によりメーガのように記を授かりたいという在家信者の成仏への願望と結びついていることが確認できる。

李［2000］は、北魏中期に中原地方で成立した表現としてこの２例を挙げ、さらにその後、北魏中期の西方影響をもとにした表現として雲崗石窟の諸作例を挙げる[36]。雲崗石窟[37]にみられる燃燈仏授記図としては以下の12例が報告されている[38]。

①第５窟　明窓東壁北、②第５Ａ窟　南壁下層東、③第５Ｂ窟　南壁下層西、④第７窟　前室東壁上部、⑤第10窟　前室東壁第１層中央、⑥第11Ａ窟　明窓東壁、⑦第12窟　前室上層東北隅、⑧第19Ａ窟　門口西壁北、⑨第34窟　西壁、⑩第35窟　南壁上層東、⑪第39窟　南壁中層　⑫第18窟　南壁　主尊左手拇指内側

12例のうち、⑤第10窟前室に見られる作例のみ、ガンダーラ、スワート、ナガラハーラ地方に見られる説話図としての性格の強い燃燈仏授記図といえる。その他の11例は、すべてカーピシー地方の影響がみられる造形となっている。①第5窟明窓東壁北の作例[39]を例に出せば、他の人物より一際大きく表された燃燈仏は正面を向き、その向かって左側には華を持つメーガが配され、燃燈仏の左足下には布髪するメーガが置かれる。それらのメーガは燃燈仏を表すモチーフのようであり、細かな人物の動作表現を除けば、カーピシー地方と同様に燃燈仏の礼拝像的構図をとる[40]。このように、カーピシー地方から雲崗石窟への図像様式の伝播は明らかであるが、その中でも、⑦第12窟前室に描かれる燃燈仏授記図には、法蔵部所伝『四分律』の影響が窺える表現が存在する。

雲崗中期（A.D.5世紀後半）に造営された第12窟の前室東壁第四層北側（図6）には、最下段中央に釈迦仏、多宝仏による二仏並坐の像が描かれ、中段中央には交脚弥勒像、その両隣には半跏趺坐菩薩像がそれぞれ描かれる。そして、上段向かって右側に降魔成道図が描かれ、その向かって左隣に燃燈仏授記図が配される。12窟の全体の構成について、李［2000］は、先に挙げた釈迦坐像、弥勒菩薩坐像と同様に、燃燈仏、釈迦仏、弥勒菩薩による三世仏の表現とみて、以下のように『妙法蓮華経』[41]の影響が窺えるとする。

> 『妙法蓮華経』巻一「序品」によれば、過去仏である日月燈明仏の息子が、釈迦仏の前生である妙光菩薩によって教化され、成仏して過去仏の燃燈仏（すなわち定光仏）となった。妙光菩薩の八百弟子の一人である求名は弥勒で、やはり妙光菩薩の教化によって将来成仏することが説かれている。つまり、この教典では釈迦の前生である妙光菩薩によって多くの菩薩が授記され、過去・現在・未来の諸仏に継承されることが強調されている。このことは雲岡石窟第12窟東壁の三世仏の組合わせによく合致する[42]。

第12窟の燃燈仏授記図（図6）をみると、燃燈仏を一際大きく表し、その布髪の場面は、挙身光を持つ燃燈仏の左足下に小さく、右膝をつき合掌した姿で表される。布髪の場面の上方には華を持つメーガ、つまり散華の場面が見られる。そして、本論で注目するのはその散華の場面でメーガの持つ華の表現で、1つの茎から5つの華が生じるという特殊な形態をとる。これは『四分律』の以下の記述と対応することが、既に李により指摘されている（李［2000］：p.29）。

池中有七莖蓮花。<u>五花共一莖</u>…復有二花。共一莖。
(T22, No.1428, p.784 c15-17)

このことから、12窟全体の構成としては「法華経」の思想が影響したものとはいえ、燃燈仏授記図は、ガンダーラ文化圏のなかでもカーピシー地方の作例と近しい表現をみせており、さ

らに、『四分律』の内容と対応する散華の図像をとっているということになる。

中国では燃燈仏授記を図像化する際、釈迦仏、弥勒菩薩をともに描くことは先述した通りだが、この三世仏を描く表現はカーピシー地方にも見られることは指摘しておかなければならない。[13]

図6. 燃燈仏授記　雲崗石窟　第12窟
前室　東壁第四層北側　上段左側

本論第1章第3節でも取り上げて検討した、カーピシー地方ショトラク出土の作例№27では、中央に燃燈仏を配し、その右脇侍として、燃燈仏により授記されたメーガが、将来世において釈迦菩薩となった姿が描かれる。そして台座には、両隣にそれぞれ男女の供養者を配する弥勒菩薩坐像が描かれ、全体として、三世仏を意図した作例といえる。さらに、同じくショトラク出土の作例№28は、中央に大きく釈迦仏を表し、その右脇侍として、燃燈仏が配されていたことが、布髪するメーガの姿によって比定される。左脇侍は欠損しているが、おそらく弥勒菩薩が描かれていたのであろう。

このように、中国でみられる燃燈仏、釈迦仏、弥勒菩薩による三世仏の組み合わせは、カーピシー地方の表現の系統に属するものと考えられる。カーピシー地方にみられるこの三世仏の表現が、中国での造像の背景に指摘される「法華経」の思想に連なるものかは定かではないが、中国で燃燈仏授記が造形化された背景には、弥勒信仰も影響していたことは確かである。

本章での検討結果をまとめると以下のようになる。カーピシー地方の図像的特徴を精査し、文献と照合したところ、カーピシー地方独特の散華された下向きの花弁の表現は、法蔵部所伝『四分律』、『仏本行集経』の記述と対応することが指摘できる。さらにカーピシー地方の作例を図像学的に踏襲したことが指摘されている中国の雲崗石窟の作例において、なかでも第12窟の燃燈仏授記図に、やはり『四分律』を典拠とするメーガの持つ華の表現が確認された。カーピシー地方では散華の華の図像に『四分律』、『仏本行集経』との関連性がみいだされたが、雲崗の作例にはこの散華された華の図像は見られず、ここで新たに生み出されたメーガが持つ華の表現が『四分律』の内容と対応したものとなっている。この点、部派の伝えた文献伝承あるいは口頭伝承が雲崗石窟の図像に影響したものとも考えられる。

しかしながら本論での検討によって、少なくともカーピシー地方および中国初期の作例に法蔵部所伝の文献との対応関係の影響が大きいことが指摘できる。

以上、本章では、(1)パキスタン北部で人気を博した燃燈仏授記図が、カーピシー地方で礼拝

像的な性格を帯びる背景に、法蔵部所伝文献の影響があること、(2)カーピシーの構図に影響を受けたとみられる中国・雲崗石窟の作例にも法蔵部所伝文献を典拠とする新たな表現が見られる点から、カーピシーから雲崗へ、図像と共に法蔵部の経説も伝播した可能性があること、の2点を論証した。法蔵部所伝文献中の同説話の挿入箇所を配慮すれば、同説話が在家信者にとってとりわけ重要視されたことは明らかである。法蔵部に対し商人階級の人々が寄進を行っていた事実も確認できることから[44]、燃燈仏授記図の説話と「二帰依の商人」説話が結びついた背景や流布には商人階級の積極的な介入も考慮に入れるべきであろう。

## 4. おわりに

本論により明らかとなったことをまとめると以下の通りである。

現パキスタンに位置するガンダーラ地方では、燃燈仏授記図は諸文献にみられるように、「仏伝の始まり」として認識され、制作されていたことが現存例により明らかである。一方、ナガラハーラ地方を経由し、カーピシー地方で受容される頃には、法蔵部所伝文献である『四分律』、『仏本行集経』では、在家信者と本説話が密接に関連付けられるように、在家信者による燃燈仏に対する信仰を窺わせる礼拝像的図像様式へと変貌を遂げている。当地方での燃燈仏への信仰は、『四分律』に説かれる「仏の髪、爪を供養するものは必ず無上道を成ずる」という思想的背景からも読み解くことができる。ガンダーラ地方からカーピシー地方への伝播に、法蔵部が関係していることは、カーピシー地方出土の諸作例の形式および図像的特徴が法蔵部所伝文献と関連性を有することや、既にカーピシー地方との図像の共通性が指摘されている中国・雲崗石窟の諸作例のうち第12窟の燃燈仏授記図が、『四分律』所収の本説話を典拠とする華の表現を有していることにより論証される。さらに中国初期の作例では、釈迦が燃燈仏に授記されたように、自らも造像という功徳を積むことで、功徳を得たいという銘文が刻まれている。三世仏の信仰と共に、このような燃燈仏に対する信仰も、既にカーピシー地方で存在していた蓋然性が高い。さらにこうした在家信者と関連する信仰を支えたのは、法蔵部所伝文献で燃燈仏授記と関連付けられている商人層ではなかろうか。

以上の結論は、決して法蔵部のクシャン朝下のガンダーラ文化圏での優位性を語るものではない。むしろ、有部教団がクシャン朝により庇護を受けていたことは明白である。本論では、ガンダーラ文化圏での燃燈仏授記図とアショーカ施土図との関連性および、その組み合わせの中国・雲崗石窟への展開については言及しなかった。燃燈仏授記説話とアショーカ施土説話をともに所収する文献は有部所伝である *Divyāvadāna* であり、有部教団の影響も視野に入れて考察を行う必要があるが、この問題は別稿に譲ることにしたい。

【表２】ガンダーラ文化圏出土燃燈仏授記図一覧表

| No | 出土地 | 推定年代(A.D.) | 法量 | 材質 | 所蔵場所 | 出典 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | サーリ・バロール | 不明 | H.70-80 | 片岩 | ペシャワール博物館 | 宮治昭氏撮影 |
| 2 | シクリ | 2-3世紀 | H.33 W.35 | 片岩 | ラホール博物館 | 栗田[2003a]：p.21,図７. |
| 3 | シクリ | 不明 | 不詳 | 片岩 | ラホール博物館 | 安田[1984]：p.75,図11. |
| 4 | シクリ | 2-3世紀 | H.34 W.20 | 片岩 | カラチ国立博物館 | 樋口編[1984]：p.57,II-13. |
| 5 | ジャマール・ガリー | 2-3世紀 | 不詳 | 片岩 | コルカタ・インド博物館 | 打本和音氏撮影 |
| 6 | ジャマール・ガリー | 2-3世紀 | H.17 W.46.7 | 片岩 | 大英博物館 | 大英博物館 HP |
| 7 | タフティ・バーイ | 不明 | H.21.5 W.39 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.18,図２. |
| 8 | タフティ・バーイ | 不明 | 不詳 | 片岩 | ペシャワール博物館 | 安田[1984]：p.67,図１. |
| 9 | タフティ・バーイ | 2-3世紀 | H.22 W.53.4 | 片岩 | 大英博物館 | 大英博物館 HP |
| 10 | ラニガト | 不明 | H.16 W.19 | 片岩 | ラホール博物館 | 西川編[2011]：p.154, Plate120-2. |
| 11 | スワビ | 不明 | H.15 W.26 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.19,図４. |
| 12 | チャルサダ | 不明 | H.18 W.43 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.25,図16. |
| 13 | ナートゥ | 不明 | 不詳 | 片岩 | ラホール博物館 | 安田[1984]：p.73,図８. |
| 14 | ブトカラI | 1世紀後半-2世紀 | H.44 W.57 | 片岩 | スワート博物館 | D. Faccenna[1963]：Pl.XLIII. |
| 15 | ブトカラI | 1世紀後半-2世紀 | H.34 W.39 | 片岩 | スワート博物館 | D. Faccenna[1963]：Pl.XXXI. |
| 16 | ブトカラI | 1世紀後半-2世紀 | H.23.5 W.26 | 片岩 | スワート博物館 | D. Faccenna[1963]：Pl. XXX III. |
| 17 | ブトカラI | 1世紀後半-2世紀 | H.32.5 W.21.5 | 片岩 | スワート博物館 | D. Faccenna[1963]：Pl.XXXIV. |
| 18 | ブトカラI | 1世紀後半-2世紀 | H.33.5 W.26 | 片岩 | スワート博物館 | D. Faccenna[1963]：Pl.LXXVI. |
| 19 | ブトカラI | 不明 | H.24 W.25 | 片岩 | スワート博物館 | D. Faccenna[1964]：Pl.CDVI. |
| 20 | パーンル | 不明 | 不明 | 片岩 | スワート博物館 | 宮治昭氏撮影 |
| 21 | スワート近郊 | 2-3世紀 | H.22.2 W.21.3 | 片岩 | メトロポリタン美術館 | メトロポリタン美術館 HP |
| 22 | スワート近郊 | 不明 | H.16 W.65 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.25,図18. |
| 23 | スワート近郊 | 1-2世紀 | H.49.2 W.68.3 | 片岩 | 大英博物館 | 大英博物館 HP |
| 24 | ハッダ | 不明 | H.39 W.31 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.25, 口絵４. |
| 25 | ハッダ | 不明 | H.22 W.39 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.25, 口絵６. |
| 26 | カーブル近郊 | 不明 | H.40.5 W.40 | 片岩 | コルカタ・インド博物館 | 宮治昭氏撮影 |
| 27 | ショトラク | 不明 | H.83.5 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.28, 口絵７. |
| 28 | ショトラク | 不明 | H.56.8 | 片岩 | カーブル博物館 | 安田[1984]：p.71,図７. |
| 29 | ショトラク | 不明 | H.40.5 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.30, 挿図４. |
| 30 | ショトラク | 不明 | H.47.7 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.32, 挿図５. |
| 31 | ショトラク | 不明 | H.29 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.32, 挿図６. |
| 32 | ショトラク | 3-5世紀 | H.26 W.14 | 片岩 | ギメ国立東洋美術館 | 東京国立博物館編[1996]：p132,図録番号139. |
| 33 | カーピシー近郊 | 3-5世紀 | H.69.3 | 片岩 | ミホ・ミュージアム | ミホ・ミュージアム HP20 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 34 | バーバー・ワリ（メセ・アイナク遺跡郡） | 3－5世紀 | H.41 W.25 | 片岩 | アフガニスタン国立博物館 | 岩井[2012]：口絵7-1. |
| 35 | ハム・ザルガール | 不明 | H.19 | 片岩 | グルバハール紡績工場陳列宝蔵 | モタメディ[1978]：p.33,挿図8. |
| 36 | ハム・ザルガール | 不明 | H.22.5 | 片岩 | グルバハール紡績工場陳列宝蔵 | モタメディ[1978]：p.34,挿図9. |
| 37 | ハム・ザルガール | 不明 | H.21.5 | 片岩 | グルバハール紡績工場陳列宝蔵 | モタメディ[1978]：p.35,挿図10. |
| 38 | ブネール近郊 | 不明 | H.29 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.19,図5. |
| 39 | ディール近郊 | 不明 | H.103 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.22,図11. |
| 40 | 不詳 | 不明 | H80.6 | 片岩 | Willard Clark collection | 栗田[2003a]：p.17,図1. |
| 41 | 不詳（カイバル・パクトゥンクワ州） | 2世紀頃 | 不詳 | 片岩 | The Government Museum & Art Gallery | 打本和音氏撮影 |
| 42 | 不詳 | 不明 | H.40 | 片岩 | 大英博物館 | 栗田[2003a]：p.18.図3. |
| 43 | 不詳 | 2－3世紀 | H.13.4 W.33 | 片岩 | 大英博物館 | 大英博物館HP |
| 44 | 不詳 | 2－3世紀 | H.62.9 W.25 | 片岩 | 大英博物館 | 大英博物館HP |
| 45 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | Spink&Son Ltd. London | 栗田[2003a]：p.20,図6. |
| 46 | 不詳 | 不明 | H.14.5 W.36 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003b]：p.288,図884. |
| 47 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]p.279,挿図2. |
| 48 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | ラホール博物館 | 栗田[2003b]：p.279,挿図3. |
| 49 | 不詳 | 2－3世紀 | H.60 W.38 | 片岩 | ラホール博物館 | 栗田[2003]：p.21,図8. |
| 50 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | カーブル博物館 | モタメディ[1978]：p.26,挿図2. |
| 51 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | The Government Museum & Art | 打本和音氏撮影 |
| 52 | 不詳 | 2－3世紀 | H.38 W.75 | 片岩 | ペシャワール博物館 | 栗田[2003]：p.21,図9. |
| 53 | 不詳 | 2－3世紀 | H.7 W.22.3 | 片岩 | 松岡美術館 | NHK編[1998]：p.130,図録番号101. |
| 54 | 不詳 | 2－3世紀 | H.26 W.38 | 片岩 | ギメ国立東洋美術館 | 東京国立博物館編[1996]：p.131,図録番号138. |
| 55 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | ラホール博物館 | 安田[1984]：p.70,図2. |
| 56 | 不詳 | 不明 | H.17.5 W.51 | 片岩 | ラホール博物館 | Philipp von Zabern [2008]：Kat.Nr.145. |
| 57 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | ラホール博物館 | 安田[1984]：p.71,図5. |
| 58 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | ヴィクトリア&アルバート博物館 | 安田[1984]：p.75,図12. |
| 59 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | コルカタ・インド博物館 | 安田[1984]：p.7,図3. |
| 60 | 不詳 | 3－4世紀 | H.37.9 W.35.8 | 片岩 | 白林寺（福岡） | 龍谷ミュージアム編[2011]：p.78. |
| 61 | 不詳 | 1世紀後半－2世紀 | H.42.8 W.33 | 片岩 | 平山郁夫シルクロード美術館 | 平山郁夫シルクロード美術館編[2009]：p48,図録番号36. |
| 62 | 不詳 | 2－3世紀 | H.8.3 | 片岩 | 平山郁夫シルクロード美術館 | 平山郁夫シルクロード美術館編[2009]：p.49,図録番号38. |
| 63 | 不詳 | 不明 | 不詳 | 片岩 | ラホール博物館 | 宮治昭氏撮影 |
| 64 | 不詳 | 不明 | H.22 | 片岩 | 不明 | Le Coq, [1922]：Tafel23b. |
| 65 | スワート地方 | 不明 | H.122 | 片岩 | 個人蔵 | 栗田[2003a]：p.22,図10. |
| 66 | タルベラ | 不明 | H.132 | 片岩 | 松岡美術館 | 栗田[2003a]：p.21,図8. |

**主要参考文献**

D. Faccenna

[1962] *"Sculptures from the sacred area of Butkara I (Swat, W. Pakistan)"*, Part2, Instituto Poligrafico dello Stato, Rome.

[1964] *"Sculptures from the sacred area of Butkara I (Swat, W. Pakistan)"*, Part3, Instituto Poligrafico dello Stato, Rome.

[1974] *"Excavations of the Italian Archaeological Mission (IsMEO) in Pakistan"*, Some Problems of Gandharan Art and Architecture, Proceedings.

L. Feer

[1883] *"Fragments exitraits du Kandjour"*, Annales du Musée Guimet, tome5, pp. 305-321.

A. Foucher

[1905] *"L'art Gréco-bouddhique du Gandhâra"*, 1 vols., Imprimerie Nationale, Paris.

[1942] *"La Vieille Route, de I'Inde, de Bactres a Taxila"*, Vol 1, Paris.

[1963] *"Les as-reliefs du stupa de sikri (Gandhara)"*, journal, Asiatique, September-October, footnote(1).

J. Hackin

[1925] *"Sculptures Gréco-bouddiques du Kapisa"*, Fondation Eugéne Piot, Monuments et mémories publiés par l'Académie des inscriptions et bells-lettres.

A. F. Howard

[1986] *"The imagery of the cosmological buddha"*, leiden.

A. Le Coq

[1922] *"Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien"*, Ergebnisse der Kgl. preussischen Turfan-Expeditionen: I. Die Plastik.

H. Lüders

[1961] *"Mathurā inscriptions /; unpublished papers edited by Klaus. L. Janert. Vandenhoeck & Ruprecht"*, Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen.

J. Marshall

[1951] *"Taxila"*, vol.II, Cambridge.

[1960] *Buddhist Art of Gandhara,* Cambridge.

J. Meunié

[1942] *"Shotorak"*, MDAFA, X, Paris.

A. Quagliotti

[1989] *"Mahākārtika (Part I)", ANNALI vol.*49 (*Fascicolo* 4), *Istituto Universitario Orientale, Napoli, pp.* 337-382.

*B. Rowland*

[1953] *"The Art and Architecture of India"*, Buddhist, Hindu, Jain, London.

R. Salomon

[1999] *"Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra, The British Library Kharoṣṭhī Fragments"*, Washington.

E. Senart (ed.)

[1882-97] *"Le Mahāvastu", 3vols*, Paris.National Museum of Afghanistan, Kabul (ed.)

[2011] *"Mes Aynak-New Excavations in Afghanistan"*, Chicago: Serindia Publications Inc.

W. Simpson
[1879-80] *"Buddhist Architecture in Jalalabad"*, Transaction of the Royal Institute of British Architects.
赤沼智善
[1925]「燃灯仏の研究」『仏教研究』6 (3), pp. 317-340.
天野信
[2012a]「『四分律』「受戒揵度」における燃燈仏授記」『印度学仏教学研究』60 (2), pp. 927-922.
[2012b]「『四分律』「受戒揵度」における仏伝の編纂：法蔵部の仏伝と菩薩蔵との関連性」『仏教学研究』(68), pp. 77-94.
[2016]「二帰依の商人と燃燈仏授記」(パーリ学仏教文化学会第30回学術大会レジュメ).
飯渕純子
[1998]「Karmasataka における燃燈仏授記物語：Karmasataka 第 2 章における Divyavadana および『根本説一切有部毘奈耶破僧事』とのパラレル物語について」『日本西蔵学会々報』(43), pp. 23-30.
石川海浄
[1940]「燃燈仏思想に関する考察」『清水龍山先生古稀記念論文集』pp. 345-366, 清水龍山先生古稀記念論文集刊行会.
井上陽
[1999]「カーピシー出土仏像にみられる焔肩の意味」『密教図像』(18), pp. 1-14.
岩井俊平
[2006]「アフガニスタンおよび周辺地域の仏教寺院の変遷」『仏教芸術』(289), pp. 100-112.
[2012]「アフガニスタンの仏教遺跡群　メセ・アイナク」『仏教芸術』(325), pp. 69-93.
打本和音
[2014]「アフガニスタン・カーピシーの弥勒菩薩の図像とその信仰」『密教図像』(33), pp. 68-84.
雲岡石窟文物保管所編
[1989]『中国石窟　雲岡石窟　一』平凡社.
[1990]『中国石窟　雲岡石窟　二』平凡社.
越後屋正行
[2011]「ブッダゴーサ作品と「ニダーナカター」における入胎の記事の相違—注釈的要素に注目して—」『印度学仏教学研究』(59) 2, pp. 182-185.
岡崎敬
[1973]『東西交渉の考古学』平凡社.
小谷仲男
[1996]『ガンダーラ美術とクシャン王朝』同朋舎.
勝本華蓮
[2010]「燃灯仏授記と『ブッダヴァンサ』の成立」『印度学仏教学研究』(58) 2, pp. 182-188.
辛嶋静志
[2010]『*A glossary of Lokaksema's translation of the astasahasrika Prajnaparamita*』International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.
栗田功
[2003a]『ガンダーラ美術 I 仏伝 (増補改訂版)』二玄社.

[2003b]『ガンダーラ美術 II仏陀の世界（増補改訂版）』二玄社.
桑山正進
[1990]『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
小森陽子
[2001]「曇曜五窟新考-- 試論第18窟本尊為定光佛」『藝術史研究』(3), pp. 375-396, 廣州中山大學出版社
定方晟
[1970]「燃灯仏の起源とナガラハーラ」『印度学仏教学研究』(37), pp. 93-98.
[2001]「二商人奉食の伝説について」『東海大学紀要.文学部』(76), pp. 77-120.
佐藤智水
[1998]「北魏仏教史論考」岡山大学文学部.
静谷正雄
[1975]「チベット訳『聖・燃燈授記大乗経』について」『印度学仏教学研究』24 (1), pp. 233-236.
[1978]『小乗仏教史の研究：部派仏教の成立と変遷』百華苑.
[1980]『仏教の歴史と文化』同朋舎.
杉本卓洲
[1995]「法蔵部と仏塔崇拝」『印度哲学仏教学』(10), pp. 84-105.
関稔
[1972]「「遠い因縁」考--「ニダーナカター」燃灯仏授記物語の特異性」」『印度学仏教学研究』(40), pp. 336-340.
田賀竜彦
[1974]『授記思想の源流と展開』平楽寺書店.
田辺勝美
[1972]「迦畢試国出土の仏教彫刻の制作年代について」『オリエント』(15) 2, pp. 87-121.
[1988]『ガンダーラから正倉院へ』同朋舎.
[2006]『仏像の起源に学ぶ性と死』柳原出版.
塚本啓祥
[1996]『インド仏教碑銘の研究 I　TEXT, NOTE 和訳』平楽寺書店.
[1998]『インド仏教碑銘の研究 II　索引・図版』平楽寺書店.
[2003]『インド仏教碑銘の研究 III　パキスタン北方地域の刻文』平楽寺書店.
中外日報社編
[1999]『中外日報』1/28,中外日報社.
常磐大定・関野貞
[1939]『支那文化史蹟　第一巻・解説』法蔵館.
内記理
[2012]「スワート地方とペシャワール盆地におけるガンダーラ美術様式の年代」『仏教芸術』(325), pp. 43-68.
[2013]「ガンダーラ彫刻の腕の接合方法」『西南アジア研究』(78), pp. 1-30.
[2014]「ガンダーラ紀年銘彫刻の制作年代」『美術史』(176) Vol.LXIII, №2, pp. 209-223.
[2016]『ガンダーラ彫刻と仏教』京都大学学術出版会.
西川幸治編

[2011]『ラニガトーガンダーラ仏教遺跡の総合調査 1983-1992—第一冊・本文篇（増補改訂版）』京都大学学術出版会.

[2011]『ラニガトーガンダーラ仏教遺跡の総合調査 1983-1992—第二冊・図版篇（増補改訂版）』京都大学学術出版会.

干潟龍祥

[1978]『本生経類の思想史的研究』山喜房仏書林.

平等通照

[1973]『印度仏教文学の研究　第二巻』印度学研究所.

平岡聡

[2007a]『ブッダが謎解く三世の物語　『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』上巻, 大蔵出版.

[2007b]『ブッダが謎解く三世の物語　『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』下巻, 大蔵出版.

[2010a]『ブッダの大いなる物語　梵文『マハーヴァストゥ』全訳』上巻,大蔵出版.

[2010b]『ブッダの大いなる物語　梵文『マハーヴァストゥ』全訳』下巻,大蔵出版.

[2016]「大乗経典は燃灯仏をどう利用したか」『智慧のともしび ： アビダルマ佛教の展開：三友健容博士古稀記念論文集』（インド・東南アジア・チベット篇）山喜房佛書林.

平川彰

[1989]『平川彰著作集第三巻　初期大乗経典の研究Ⅰ』春秋社.

平山郁夫シルクロード美術館編

[2009]『ガンダーラ—仏像のふるさと—』平山郁夫シルクロード美術館.

福山泰子

[2009]「アジャンター石窟寺院にみる授記説話図について—5，6世紀におけるガンダーラ美術の影響の一事例として—」『仏教芸術』(304), pp. 9-36.

A. フーシェ著・日仏会館編

[1928]『仏教美術研究』大雄閣.

外薗幸一

[1983]「仏伝経典の形成過程について」『鹿兒島経大論集』(24) 3, pp. 47-69.

前田恵学

[1964]『原始仏教聖典の成立史的研究』山喜房仏書林.

松村淳子

[2011]「*An Independent Sutra on the Dipamkara Prophecy ： Tibetan Text and English Translation of the Arya-Dipamkara-vyakarana nama Mahayanasutra*」『国際仏教学大学院大学研究紀要』(15), pp. 134-74.

[2012]「*The Formation and Development of the Dipamkara Prophecy Story ： The Arya-Dipamkaravyakarana-nama-mahayanasutra and Its Relation to Other Versions*」『印度学仏教学研究』(60) 3, pp. 1204-1213.

水野清一

[1970]『バサワールとジェラーラーバード・カーブル』京都大学.

水野清一・長廣敏雄

[1955]『雲岡石窟：西暦五世紀における中國北部佛教窟院の考古學的調査報告：東方文化研究所調査 昭和十三年-昭和二十年. 第十三・十四巻 第十九洞および第二十洞』京都大学人文科学研究所雲岡刊行会.

宮崎展昌

[2010]「『阿闍世王經』と『六度集經』第86經における「燃燈佛授記」の記述」『東方学』(119), pp. 179-164.

宮治昭

[1990]「ガンダーラの弥勒菩薩の図像について」『名古屋大学文学部研究論集』(108), pp. 185-213.

[1992]『涅槃と弥勒の図像学：インドから中央アジアへ』吉川弘文館.

[1996]『ガンダーラ　仏の不思議』講談社.

[2010]「第三章　付録 カーピシーの「燃燈仏授記」浮彫」『インド仏教美術史論』所収, 中央公論美術出版.

[2011]「ガンダーラ美術研究の現状」『國華』(116) 8, pp. 17-32.

[2016]『仏像を読み解く　シルクロードの仏教美術』春秋社.

村上東俊

[2012]「燃灯仏に見られる焔肩と『六度集経』について」『印度學佛教學研究』60 (2), 1042-1039.

モタメディ遙子

[1978]「アフガニスタン出土の燃燈仏本生譚の諸遺例」『仏教芸術』(117), pp. 20-40.

安田治樹

[1981]「雲岡石窟の彫刻に見られる本縁説話図―アショーカ施土物語と燃燈仏授記本生―」『仏教芸術』(135), pp. 30-48.

[1984]「ガンダーラの燃燈仏授記本生図」『仏教芸術』(157), pp. 66-78.

[2010]「ガンダーラの燃燈仏授記本生図再考」『立正大学大学院紀要』(26), pp. 1-26.

山田樹人

[1999]『ガンダーラ美術の見方』里文出版.

湯山明

[1999]「Mahāvastu-avadāna―原典批判的研究に向けて―」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』(2), pp. 21-38.

吉村怜

[1959]「盧舎那法界人中像の研究」『美術研究』(203).

[1999]「盧舎那法界人中像再論」『仏教芸術』(242).

李淞

[1988]『仏教美術全集　陝西仏教芸術』台湾芸術家出版社.

李静傑

[2000]「中国北朝期における定光仏授記本生図の二種の造形について」『美学美術史研究論集』(17・18), pp. 23-50.

**註**

① クシャン朝四代君主であるカニシカⅠ世の治世（A.D. 2 世紀第 2 四半期～中頃）から 1 世紀に渡って、最もガンダーラ美術が繁栄し、その萌芽としては、初代君主であるクジュラ・カドフィセス時代に遡り、さらに、サカ族時代に粗野で稚拙な先駆的なプロト・ガンダーラ美術が制作されていた（Marshall [1951]：p. 693.；[1960]：p. 17)。カニシカⅠ世により創設されたカニシカ紀元の開始年問題の詳細は、内記 [2016]：p. 13,脚注⑭を参照。

② ガンダーラ美術で著名な古代ガンダーラとは、狭義には現在のパキスタン西北部アフガニスタ

ンとの国境近くに位置するペシャワール地方一帯を指す古名であるが、いわゆるガンダーラ様式の彫刻が出土するのはそれよりさらに広く、ペシャワール盆地の東南に位置するタキシラ地方、北の山間部に位置するスワート地方、現在のアフガニスタンのジャラーラーバード周辺のナガラハーラ地方、ジャラーラーバードを北西へカーブル河を上ったところにあるカーブル周辺とその北方の盆地一帯に位置するカーピシー地方などを加えた地域が含まれる。近年では、この一大文化圏を大ガンダーラ（Greater Gandhāra,）と呼ぶことが定着しつつある（Salomon［1999］：pp. 3-4.）。本稿では便宜上、それぞれの地域を以上のように呼称する。

③ 便宜上、本稿における燃燈仏授記説話に登場する人物の呼称は、特定の文献を引用する以外は *Mahāvastu* の名称に統一する。

④ Dīpaṃkara は燃燈仏の他に、定光仏、錠光如来、普光仏、燈光仏などと意訳され、題想竭羅佛と音訳される。日本では従来、燃燈仏という名称が一般化し用いられるが、初期の漢訳文献には定光（錠光）仏という名称が多くみられ、さらに中国の北魏時代の銘文にも定光仏という名が刻まれている。

⑤ №12, 23, 47, 48, 53, 56.

⑥ D. Faccenna［1974］

⑦ №14-№19.

⑧ W. Simpson［1879-1880］は、『大慈恩寺三蔵法師伝』に伝承される燃燈仏授記の本生処に従い、アヒンポシュ〈Ahin Posh〉を発掘した（Simpson［1879-1880］：pp. 37-64）。A. Foucher［1942］は、この仏塔址を本生処であるとみなしている（Foucher［1942］：pp. 152-153）。しかし、水野［1970］はジャラーラーバード付近の仏蹟を調査し、アヒンポシュの仏塔址は「大きな塔（底部径24m）に属するが、300尺まで達するかどうか疑わしい。また布髪供養のように泥水を問題とするときは、台地の上のアヒンポシュより、タパ・ホァジャ・ラホリー〈Tapa Khwaja Lahoree〉のようにカーブル河岸の低地の方が伝説の地としてふさわしい」（水野［1970］：p. 59）とする。このように、本生処がジャラーラーバード付近であったことは一致しているが、明確な位置までは特定されていない。

⑨ 他に、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』に本生処としての記述があり、『洛陽伽藍記』には那竭城に関する記述が見られる。「從此南二十餘里、下嶺濟河至那揭羅喝國。大城東南二里有窣堵波。高三百餘尺、無憂王所造。是釋迦菩薩於第二僧祇遇然燈佛、敷鹿皮衣、及布髪掩泥得受記處。（中略）傍有老僧爲法師説建塔因縁。法師問曰、菩薩布髪之時（中略）次西南十餘里有窣堵波。是佛買華處。（中略）又聞燈光城西南二十餘里有瞿波羅龍王所住之窟。」『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（T50, №2053, p. 229b10-c11）。「那竭城中有佛牙佛髪。並作寶函盛之、朝夕供養。」『洛陽伽藍記』（T51, №2092, p. 1021c24-c25）。

⑩ №24, №25.

⑪ №26～№37.

⑫ カーピシー地方の図像では、燃燈仏授記図に限らず、双神変像にも焔肩の表現が見られるなど、焔肩仏が多数出土している。焔肩の表現は、イラン系遊牧民が元々信仰していたゾロアスター教に由来するもので、クシャン朝発行のコインには、焔肩を持つ王族の姿が見られる。焔肩についての詳細は、井上［1999］、宮治［2010］：pp. 74-91、村上［2012］を参照。

⑬ 宮治［2010］によれば、燃燈仏の上方に描かれるメーガは、しばしば帝釈天と一対として描かれる梵天のイメージが重ねられており、礼拝像としての性格を強めるだけではなく、『修行本起経』などに説かれように、メーガが幾つかの来世において帝釈天、梵天王として再生することを暗示しているとする（宮治［2010］：p. 95）。

⑭ 田賀は、燃燈仏自身の仏伝から、メーガへの授記までを含めて燃燈仏物語としている（田賀［1974］：p. 133-141）。

⑮ 田賀［1974］：pp. 129-133.

⑯ 文献の配列は、パーリ語文献、サンスクリット語文献、漢訳文献（訳出年代順）となっている。

⑰ 赤沼［1925］：pp. 320-321.

⑱ 天野［2012a］：p. 924.

⑲ NHK編［1998］：pp. 63-68、詳細は脚注44を参照。

⑳ 静谷［1978］：p. 191-193.

㉑ 塚本［1996］：p. 967.

㉒ Know（ed.）［1929］：p. 113 f., no. 45.

㉓ Lüders［1973］：pp. 407-410.

㉔ 静谷［1989］：p. 192.

㉕ 法密部は法蔵部（Skt. Dharmaguptaka）の異訳。

㉖ カーピシー地方の仏教彫刻の編年問題は未だ明確な答えは出ておらず、2－3世紀説（Meunié［1942］；田辺［1972］）、3－4世紀説（Hackin［1925］；Rowland［1953］）、4－5世紀説（宮治［1985］；福山［2009］）などの説がある。

㉗ 外薗［1983］：pp. 60-61の仏伝経典内容梗概比較表を一部改変し、仏伝文献における燃燈仏授記説話の挿入箇所の表とした。

㉘ 『仏本行経』では釈迦のヴァイシャーリー訪問後に挿入される。

㉙ 成道後間もなくの説話のため、通常僧団は存在せず、三宝の中の仏、法の二宝に帰依するため二帰依であるが、『中本起経』、『太子瑞応本起経』、『修行本起経』などでは僧団の成立を想定してか、三宝に帰依するという記述のみられる説話も存在する（定方［2001］：p. 77参照）。

㉚ 他に「二帰依の商人」説話を有する文献は、*Mahāvavagga*、『五分律』、*Nidānakathā*、『修行本起経』、『中本起経』、『太子瑞応本起経』、『普曜経』、*Mahāvastu*、*Lalitavistra*、『方広大荘厳経』、『過去現在因果経』などが挙げられる。

㉛ 「即於菩提樹下結加趺坐、七日不動、受解脱樂。（中略）於七日中未有所食。時有二賈客兄弟二人、一名瓜、二名優波離。將五百乘車、載財寶、去菩提樹不遠而過。時樹神篤信於佛。曾與此二賈客舊知識。欲令彼得度、即往至賈人所語言、汝等知不、釋迦文佛如來等正覚、於七日中具足諸法、於七日中未有所食。汝等可以蜜麨奉獻如來。令汝等、長夜得利善安隠快樂。爾時兄弟二人、聞樹神語已歡喜、即持蜜麨往詣道樹、遙見如來、顔貌殊異、諸根寂定最上調伏。如被調象、無有卒暴。如水澄靜無有塵穢。見已發歡喜心。於如來所前至佛所頭面禮足在一面立。時二人白世尊言。今奉獻蜜麨慈愍納受時世尊復作如是念。今此二人奉獻蜜麨。當以何器受之。復作是言過去諸佛如來至眞等正覚。以何物受食諸佛世尊。不以手受食也。時四天王立在左右、知佛所念往至四方、各各人取一石鉢奉上世尊。白言、願以此鉢、受彼賈人麨蜜。時世尊慈愍故即受四天王鉢、令合爲一、受彼賈人麨蜜。受彼賈人麨蜜已。以此勸喩。而開化之。即呪願言。所爲布施者。必獲其利義。若爲樂故施後必得安樂。汝等賈人今可歸依佛歸依法。即受佛教言大徳、我今歸依佛歸依法。是爲優婆塞中最初受二歸依。是賈客兄弟二人爲首。時二賈人白佛言、我今從此欲還本生處。若至彼間當云何作福、何所禮敬供養。時世尊知彼至意、即與髪爪語言、汝等持此往彼作福禮敬供養。時賈人雖得髪爪、不能至心供養言、此髪爪世人所賤除棄之法。云何世尊持與我等供養。時世尊知賈人心中所念、即語賈人言、汝等莫於如來髪爪所生毛髪許懈慢心。亦莫言世人所賤。云何如來使我供養。［ここに髪爪の供養と功徳を説くため、種々の神々が仏の髪爪を供養してきたこと、さらに燃燈仏授記説話が挿入される。］賈人當知、學菩薩道、能供養爪髪者必成無上道。以佛眼觀天下。無不入

無餘涅槃界而般涅槃。況復無欲無瞋恚無癡。施中第一、爲福最尊。受取中第一、而無報應也。爾時賈人兄弟二人、即從座起復道而去。」「二帰依の商人」『四分律』巻第三十一・受戒揵度（T22, №1428, pp. 781c12-785c27）

㉜ カーピシー地方と雲崗石窟との関連性については、安田［1981］；李［2000］；打本［2014］などを参照。

㉝ 図版は李［1988］：p. 45, 47を参照。

㉞ 皇興五年（A.D. 471）に制作された陝西省興平県出土の交脚弥勒菩薩像に関して李［2000］は、仏像全体は三世仏を意図した構成であり、『太子瑞応本起経』巻上に基づいて彫刻されたとする。さらに、乗象入胎の場面には象が円盤形内に彫られた表現がみられ、それはガンダーラの伝統を継承しているが、菩薩が象に乗る表現はガンダーラにはみられず、中国で創始されたとする。以上のことから、多少の西方影響がみられるが、全体的にはほとんど中原で文献に基づいて造形化されたものであると比定する（李［2000］：pp. 25-27；図版はp. 43図１、２を参照）。

㉟ 「清信士京（字欠け）芳根植於遠著英賢（字欠け）、故能信悟。（中略）造像一軀。（中略）慶鐘（字欠け）男女大小、内外親族、諸（字欠け）、諸知識、神期妙境、共覩龍華初昵、願在先会。（中略）乗六神通、隋心任適」（李［2000］：p. 38, 註⑪）。

㊱ 李［2000］によれば、中国における燃燈仏授記図は３つの表現に大別ができる。(1)北魏中期の中原地方で成立した表現、(2)北魏中期の西方影響をもとにした表現、(3)北魏晩期以降の中原地方で発展した表現。その中で雲崗石窟第12窟の作例は(2)に分類され、(2)の特徴として李は、「ガンダーラ・アフガニスタンの西方影響が顕著に見られ、当時の都である雲崗石窟のある平城は、西方と密接な文化交流があったことが想像される。」とする（李［2000］：pp. 27-30）。

㊲ 長廣［1990］によれば、雲崗石窟のそれぞれの石窟の推定年代について、第１窟から第20窟までの大窟の造営は460年頃に始まり、494年頃に終結したと考えられるとし、この期間の石窟を様式史的に区分すると、第16窟から第20諸窟は初期、第１窟から第３窟、第５窟から第13諸窟はすべて中期と推定する。中期造営の石窟の時代順は、第７・８双窟に第９・10双窟が続き、第11から13諸窟は錯綜しているためはっきりした年代は特定できないが、それに続き第１・２双窟、第５・６双窟、第３窟と続くとする（雲岡石窟文物保管所編［1990］：pp. 197-214）。この年代論に基づけば、雲崗石窟において最も初期にあたる燃燈仏授記図は第18、19窟の作例であり、続いて第７窟となるが、第７窟の図は磨滅が激しく判別が困難である。

㊳ ①～⑪は安田［1981］により報告され（安田［1981］：pp. 36-37）、⑫は小森［2001］により燃燈仏授記図であると比定されている（小森［2001］：pp. 375-396）。さらに小森［2001］は、第18窟の主尊自体も燃燈仏であると比定するが、これには盧舎那仏説（松本［1937］：pp. 291-315.；常磐［1939］：p. 17.；吉村［1959］；［1999］）、釈迦仏説（長廣［1955］：p. 39.；Howard［1986］；宮治［1992］：pp. 330-331.；佐藤［1998］pp. 134-154.）と諸説あることから本論では取り扱わない。

㊴ 安田［1981］：p. 40, 図13参照。

㊵ 安田［1981］：p. 40-42；李［2000］：p. 29.

㊶ 「過去無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾時有佛號日月燈明如來。（中略）次復有佛亦名日月燈明、如是二萬佛皆同一字、號日月燈明。（中略）其最後佛未出家時有八王子、（中略）各領四天下。是諸王子聞父出家、得阿耨多羅三藐三菩提、悉捨王位亦隨出家、發大乗意。（中略）時有菩薩名曰妙光。有八百弟子。（中略）。佛滅度後、妙光菩薩持妙法蓮華經、滿八十小劫爲人演説。日月燈明佛八子皆師妙光、（中略）皆成佛道。其最後成佛者、名曰燃燈。八百弟子中有一人號曰求名、（中略）以種諸善根因縁故、得値無量百千萬億諸佛、供養恭敬、尊重讃歎。彌勒當知、爾時妙光菩薩豈異

人乎、我身是也。求名菩薩汝身是也。」『妙法蓮華経』巻一・序品（T9, №262, pp. 3c18-4b14）。

㊷ 李［2000］：p. 29.

㊸ 李は、ショトラク出土、雲崗石窟第12窟の作例ともに三世仏を意図した造形であることを指摘しており、ショトラク出土の作例では、『四分律』巻三十一において、梵志弥却摩納が弥勒菩薩の前生である珍宝仙人の弟子として登場していることを挙げ、経典自身も仏陀の系譜を重視しているとし、雲崗石窟第12窟の作例でも、三世仏の表現がみられ、さらに釈迦多宝仏は『妙法蓮華経』による大乗仏教の象徴的表現であり、この三世仏の表現は大乗仏法が過去から未来へ諸仏によって継承されることを意味するという（李［2000］：pp. 28-30）。

㊹ クシャン朝時代に制作されたとみられる、現在マトゥラー博物館に所蔵される菩薩坐像の台座には法蔵部の名を挙げる寄進銘文が刻まれている（菩薩坐像（一部）台座：寄進銘文 マトゥラー出土 A.D. 2 世紀中葉 マトゥラー博物館所蔵）。

[Text (Skt. &Pkt.)][Sa 10]7 v[a 4 di]. etasa purvāyā Dharm[a]k[a]sa sovaṇik[a]sa küṭubiniye upasikā N[a]gapiyā bodhisva(sa)tva pratiṭhāpeti svakāyā cet[i]-yākaṭ[i]y[ā] acāryana Dharmagutakāna pratigrahe.44［和訳］（カニシカ紀元）17年、雨季の第 4 月×日、この時、金細工師 Dharmaka の妻 Nagapiyā 優婆夷により、自分の制多堂において、法蔵部の諸師の所領として、菩薩（の像）が造立された（Lüders［1961］：Folge; Nr. 47, p. 187, §150）。静谷［1978］はこの銘文からみて「(紀元後 2 世紀中葉）法蔵部は土着の商工業者の熱心な支持をうけた。信者たちは法蔵部の寺院の境内に「自分の」と呼ぶ小祠堂をもった。したがってしばしば寺を訪れて礼拝聞法したであろう。」とする（静谷［1978］：p. 189）。

さらにバーミヤーン出土の陶製壺に記された銘文に寄進者として商人、その所領者として法蔵部の軌範師の名がみられる。(陶製壺：銘文　バーミヤーン出土）

[Text(Skt.)] Mahādānapatisya Maṅgalasya vai — pasya⁺ Ca — ntasya⁺ Ca — guptsya⁺ saṃghe caturdiśe Mahāsenāraṇye ācāryyānāṃ Dharmguptakānāṃ parigrahe dānamukhe［和訳］〔これは〕Maṅgala の大施主、vaiśya の商人 Ca..ta の Ca（ndra）gupta の四方僧伽において、Mahāsena の〔僧〕園における Dharmaguptaka（法蔵部）の軌範師たちの所領としての寄進である（静谷［1978］：p. 191）。前述した法蔵部所伝文献の二帰依の商人中に挿入される燃燈仏授記説話同様、これらの寄進銘文から法蔵部と在家信者、特に商工人との繋がりが指摘される。またはアフガニスタン（ハッダ）より出土した、大英図書館所蔵のカローシュティー文字で書かれた、現在最古の仏教写本は、法蔵部への寄進と銘のある壺に納められていたことから、法蔵部の影響が、この地域へ及んでいだことが指摘される。詳細は NHK 編［1998］：pp. 63-68参照。